52.　巨大な後腹膜脂肪腫の1治験例

小渋　智哉，中島　和彦，○紅谷　　周
（船橋中央病院）

症例，71歳男子で腹部膨満および食思不振を主訴とする。最近になり食思不振高じて，るい痩が現われ，腹部膨隆著明に目立ち，頻尿，動悸息切れが出現してきた。右上腹部より下腹部にかけて超小児頭大の硬い腫瘤を触れる。レ線検査に，横隔膜挙上，消化管の上方および左方圧排像，右尿管の外方偏位著明。正中切開にて腫瘍を完全に摘出したが総腸骨動脈上部に Stiel と思われる部がある。大きさは32×29×18 cm，重さ7000 g，組織学的に脂肪腫であった。硬い部分は Nekrose に陥った部位であった。術後経過良好で愁訴は消え第18病日全治退院した。

追加　小西　義男（小西外科病院）

巨大な腹部膨満を呈した25歳の男子で，幼小のころより巨大結腸症と誤診されていた一症例の術前診断，術中惹起しうる循環系の変動について言及した。幸い剔出し得た腹部腫瘍の重量は29.5 kg，病理組織学的には神経鞘腫でS状結腸間膜より発生したものであった。

53.　最近1年間の手術統計および症例よりみた沼津市立病院の中央病院としての機能および今後の問題点

○岡村　隆夫，大津　　饒，原　　壮
（沼津市立病院）

昭和42年10月より，昭和43年9月までの沼津市立病院において施行した手術総数は440例であり，中央病院としての立場からその内容を検討して見た。

虫垂切除術が多いということは論外として，病院内外からの紹介患者が圧倒的に多くその内容も，老人外科，小児外科，脳外科，胸部外科，血管外科などの広範囲にわたっているのが特長である。患者の治療にあたって，各科の協力が重要であることが挙げられる。将来の問題として，財政面から見て，福祉病院としての性格を強める必要がある。

54.　胃愁訴を主訴とした大腸癌数例

○前田和嘉一，尾崎　梓，伊藤新次朗，中村　武
（中村病院）

最近3年間にわれわれの経験した結腸癌は11例，当院における癌手術患者の2.7%に当たるが，このうち，初診時に確診を下すに至らなかった結腸癌3例のほか，直腸癌も1例経験した。

元来，結腸癌の初期症状は不定であり，症状の現われ方もきわめて徐々であって，初期症状に最も多い腹痛，腹部膨満感，便秘などの症状は，胃疾患にも共通する所が多く，ややもすれば，胃のレ線検査のみで見逃される恐れも十分ある。よってわれわれは早期診断を可能とし，見落しを避けるため，最近次のような指針を設け Routine として行なっている。

すなわち，① 年令が30歳以上の患者で，② 腹痛，腹部膨満感があり，③ 便秘，または下痢などの続く者全員に対し，㋑ 胃のレ線検査に引続き経口的に Darm 追求を行なうこと，㋺ 糞便の潜血反応，指診を行なうこと，㋩ これらにより少しでも疑わしければ，直腸鏡検査および注腸造影を行なうこと。

55.　胃壁嚢腫の1例

○高橋　　勇，鈴木　太郎
（清水厚生病院）

従来胃壁嚢腫は良性腫瘍のうちでもまれな疾患とされ，その病理組織学的所見についての統一的な見解に乏しい。最近偶然の機会から胃壁嚢腫の1例を経験したので報告する。

症例は40歳の主婦で，昭和43年9月12日偶然当院の胃集検で幽門部の異常を指摘された。胃X線所見は幽門部にポリープ様の陰影欠損とその球部への移動。胃カメラ所見は粘膜下腫瘍を思わせる柔かな粘膜の膨隆。よって10月18日胃切除術施行。切除標本は肉眼的に幽門部前壁に嚢腫状の軟かな半球状隆起を認め，穿刺により漿液性液5 cc を証明。組織学的には大きな嚢腫の周囲に萎縮した胃粘膜の粘膜下固有層に多発性の胃腺より発生したと考えられる嚢腫様の拡張を認め，粘膜筋板中にも内腔に分泌物を有する多数の嚢腫を認めた。それら嚢腫の内腔は2～3層の円柱上皮で被われていた。以上の組織学的検索から，その発生機構において慢性胃炎が深い関連性を有するものと思われる所見をえた。

56.　デキストランの胃切除におよぼす影響について

○坂田　早苗，石崎　省告
大和田　操，篠崎　良一
（宇都宮外科病院）

最近，デキストラン（以下 Dx と省略）製剤が代用血漿，あるいは Plasma Expander として，胃切除の際に使用されるようになったが，Dx が末梢血管血流改善，血栓発生防止作用をもっているためか，胃切除後縫合部より出血する症例が増えている。すなわち，手術当日より術後5～6病日ころまで，ブドウ糖，リンゲルなどと

ともに1日500 cc 使用した。そして Dx. 使用量と出血率をみると低分子 Dx. 1500～2000 cc 使用群379例中28例に出血が見られ，出血率は7.4%にも上っている。また，対照群である Dx 非使用群328例中，出血したのはわずか1例で出血率は0.3%である。

次に Dx を使用した530例中，252例の47.3%に術後瘙痒感が認められた。この瘙痒感は Dx 使用後2～6週ころより発現し，1カ月から数カ月間持続するもので，入浴就床等の温暖刺激などにより全身に発現する。この瘙痒感と肝機能およびアレルギー体質との関係はない。ゆえに胃切除に際し，不用意に Dx を使用すべきではないと思われる。

57. 削岩機による発生例を含む腸石（肺石）イレウスの3治験例

山野　徳雄（愛媛県立南宇和病院）

症例1. 68歳男。1年前より胃症状あり，削岩機を腹にあてて2時間仕事をおこなったところ腹痛が現われ，しだいに強くなり，嘔吐も起こる。

空腸に結石あり，この結石の性状より精査して胃にも結石があった。胃石も腸結石も3×3×2.5 cm で13 g と12 g の大きさで，初めは1つのものが削岩機の振動で割れたものであった。シブオール陽性。

症例2. 11歳男子。腹痛と吐気および腹部膨満。回腸に結石あり，3.5×2.3×2.0 cm 5 g シブオール陽性。

症例3. 6歳女子。腹痛，嘔吐，移動性腫瘤空腸に結石あり4×3×3 cm 12 g. シブオール陽性。

以上3例のうち1,2は柿が好物である。3例とも白血球増多あり，腹部単純撮影で小腸にガスがたまり多く，さらに症状が激しくないことが特長であった。

58. 最近経験した2,3の興味ある症例について（胃良性腫瘍，胆道疾患）

○高橋　康，大山　修身
（熊谷協同病院）

症例1は，57歳の男で術前X線診断では，良性粘膜下腫瘍と診断されたが，摘出標本では，胃前庭部前壁の筋層から粘膜下に増殖している胃血管腫の症例であった。

症例2は，50歳の女で嘔吐を主訴としX線診断で十二指腸球部の polyp と診断されたが，摘出した標本から，十二指腸前壁の粘膜下嚢腫であった。

症例3は乳頭膨大部癌で腫瘍摘出術施行後特異な経過をとった例であった。

症例4は，51歳女で，胆石症の診断で胆嚢摘出術後合併症を併発し最後に瘻管空腸吻合術を施行して全治させた症例である。

以上2,3の臨床的に興味ある症例についてその経過を中心に報告した。

59. 同種血症候群の排除を目的とした，わたくしどもの Compact disc oxygenator について

○田宮　達男，堀部　治男，西沢　直
（国立千葉病院）

わたくしどもは一連の基礎的実験により，血液の長時間非生理的酸化により生じる血球，血漿間の膠着反応が，同種血の存在下でさらに高進し，これが同種血症候群をもたらすことを明らかにした。このことよりも同種血充塡量の消滅はきわめて重要である。最近無血充塡法が抬頭してきたが，これらはいずれも気泡型人工肺を使用したもので，長時間灌流を要する場合には問題が多い。わたくしどもは血液破壊の少ない円板型人工肺を Compact 化することにより無血充塡を可能とした。これにより体重30 kg 以上の者では原則的に無血，それ以下でも100～300 cc の充塡血量で2時間余の体外循環が安全にできるようになった。この最大の臨床的特長は進行性低血圧や重篤な腎障傷が影を潜めたことで，Fallot 四徴症根治術，弁移植術，肺高血圧を伴う中隔欠損症や乳幼児の開心術の成績が飛躍的に向上した。この Compact circuit system 採用以来107例の開心術症例の死亡率はわずか3%である。

60. 最近一年間に経験した胃早期癌10例について

○新井洋太郎，軽部　達夫，新井嶺次郎
（新井病院）

昭和42年10月1日より昭和43年9月30日までの1年間に当院で手術を行なった胃疾患は202例であり，胃癌は47例であった。胃癌症例のうち早期癌は10例で胃癌全例に対する比率は21.3%であり，男女比は5:5で同率であり，年令は35歳から61歳までで平均年令は51.5歳であった。病巣の大きさは直径が1 cm 未満のもの2例で，9例までが4 cm 未満のものであった。組織学的所見は1例 C. simplex であったが，ほかの9例は ad. carcinoma であった。内視鏡的分類では II$_c$ を主病巣としたものが多かったがI型のものも2例あった。胃ポリープの手術症例は19例なので，ポリープ全体に対するI型早期癌の比率は10.5%であった。10例のうち何らかの自覚症状を訴えて来院したものは8例で，ほかの2例は，集検で疑いをもたれた61歳の女性と，自分の息子が胃癌で手術をうけたので念のため胃透視をうけて発見された60歳の男性であり，この2人は